

## PAC 分析による精神障害領域臨床実習でのスキル活用に関する 作業療法学生の認識調査

### A PAC Analysis of Occupational Therapy Students' Perceptions of Skill Utilization in Mental Health Clinical Practice

吉村 友希<sup>\*1</sup>, 戸田 真志<sup>\*2</sup>

YUKI YOSHIMURA<sup>\*1</sup>, Masashi TODA<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> 熊本保健科学大学

<sup>\*1</sup> Kumamoto Health Science University

<sup>\*2</sup> 熊本大学

<sup>\*2</sup> Kumamoto University

Email: yoshimura@kumamoto-hsu.ac.jp

**あらまし**：作業療法士養成教育における精神障害領域実習では、学生が対人関係に困難を抱えやすく、実践的スキルを活用できない場面も少なくない。筆者らはこれまで、自己効力感の向上を図る授業設計に取り組んできたが、授業で修得したスキルが実習現場でどのように活用されたかについては検討が不足していた。そこで本研究では、PAC 分析を用いて、臨床実習場面でのスキル活用に対する学生の認識を明らかにすることを目的とした。結果、実習自己効力感の高い学生はスキルを柔軟に活用していた一方、低い学生は対人不安や予期せぬ出来事により、十分に活用できていないことが示唆された。本研究は、実習と授業設計をつなぎ、教育現場における自己効力感支援のあり方に新たな視点を提示するものである。

**キーワード**：授業設計、作業療法、精神障害領域実習、質的分析、PAC 分析

#### 1. はじめに

作業療法士養成教育における精神障害領域臨床実習では、精神障害領域特有の理解のしにくさや否定的なイメージにより、学生の苦手意識や患者との対人関係の困難さがしばしば報告<sup>(1)</sup>されており、実践的スキルの習得支援が急務である。筆者らは、Problem-based learning や真正課題を取り入れた授業設計<sup>(2)(3)</sup>により、知識・スキル・態度の統合を図るとともに、Bandura の理論に基づいた自己効力感の向上にも取り組んできた<sup>(2)</sup>。しかし、これまでの研究では、授業で得たスキルが実習場面でどのように認識され、実際に活用されたかという点に踏み込めていなかった。

そこで、本研究では、個人の主観的態度構造を可視化できる PAC (Personal Attitude Construct) 分析<sup>(4)</sup>を用い、学生のスキル活用に対する認識を明らかにすることを目的とする。

#### 2. 方法

##### 2.1 対象者

本研究では、実習自己効力感の高低が PAC 構造にどのような違いを生むのかを探索的に検討するため、2024 年度に精神障害領域で総合実習を経験した学生の中から、実習自己効力感尺度<sup>(5)</sup>の得点が最も高かった者と最も低かった者の 2 名を対象に選定した。最も高い者の得点は 8.31 点、最も低い者の得点は 5.84 点であった。

##### 2.2 手続き

手続きは内藤<sup>(4)</sup>に倣い、図 1 のように行った。な

お、連想刺激文は、「あなたは、精神障害領域の実習において自身の力を発揮できましたか。」であった。

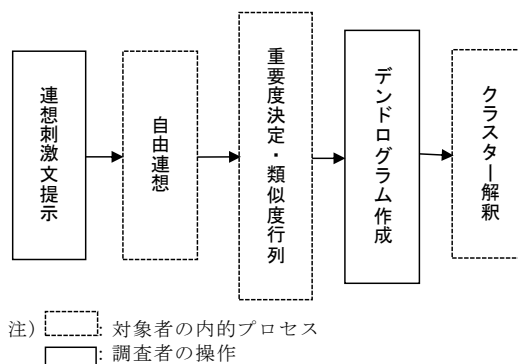


図 1 PAC 分析の手続き

#### 3. 結果と考察

##### 3.1 実習自己効力感の高い事例

高実習自己効力感事例の結果を表 1 に示す。事例は、作業療法の場面で、患者を観察しながら評価し、意図的に患者と関わり、患者の得意なことを治療に活用していた。

##### 3.2 精神障害領域臨床実習自己効力感の低い事例

低実習自己効力感事例の結果を表 2 に示す。事例は、作業療法の場面で、全体に目を配り、特定の患者に合わせた対応を行っていた。しかし、実習中は体調不良が続き、さらに指導者への質問のしづらさや突発的な出来事への対応の難しさも重なっていた。

表 1 実習自己効力感の高い事例のクラスター（簡略）

| CL | クラスター名       | 代表的な発話内容               |
|----|--------------|------------------------|
| 1  | 作業療法評価としての観察 | 患者を観察しながら評価を行った        |
| 2  | 治療的介入        | 創作活動を通じて患者との会話から理解を深めた |
| 3  | 個人因子         | 患者の得意なことを治療に活用した       |

※多角的にスキルを活用できている様子がうかがえる

表 2 実習自己効力感の低い事例のクラスター（簡略）

| CL | クラスター名       | 代表的な発話内容             |
|----|--------------|----------------------|
| 1  | 集団場面での治療的介入  | 集団全体に目配りを行いリスク管理に努めた |
| 2  | 患者に合わせた治療的介入 | 患者に合わせた関わり方を工夫した     |
| 3  | 自分の心身面       | 体調不良が続き、集中できなかった     |
| 4  | 連絡・相談の困難さ    | 指導者にうまく相談できなかった      |
| 5  | 想定外な出来事への対応  | 突発的な出来事にパニックになった     |

※対人不安や困難さがスキル活用を妨げていた可能性がある

4. まとめと今後の課題

高実習自己効力感の学生は、患者中心の態度を持ち、治療的関わりを柔軟に展開していた。一方、低実習自己効力感の学生は、突発的な不安によって、スキルを活かしきれない場面が見受けられた。これは、自己効力感が対人支援場面での認知的余裕や柔軟性に影響を及ぼしている可能性を示唆している。

本研究の知見は、作業療法士養成教育における自己効力感育成の重要性を示すものであり、臨床教育と授業設計をつなぐ架け橋としての意義を持つ。

今後は対象者数を増やし、PAC 分析による態度構造の類型化を試みることで、学生のスキル活用を促進するための教育的介入指針の構築を目指す。本研究の示唆を表 3 に示す。

表 3 本研究の示唆

| 教育的インプリケーション                               |
|--------------------------------------------|
| ・ 学生の内面に焦点を当てた支援が必要                        |
| ・ PAC 分析は主観的認識の可視化手法として教育に応用可能             |
| ・ 教員はスキル提供だけでなく、学内および実習場面の心理的安全性の確保にも注力すべき |

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP22K02903 の助成を受けたものである。

参考文献

(1) 四本かやの, 永井栄一, 長尾 徹, 野田和恵: “精神障害者の学内実習参画による学生の臨床における技能・態度についての自己認識と精神障害者に対するイメージの変化”, 神戸大学保健学科紀要, Vol. 21, pp. 109-119 (2006)

(2) 吉村友希, 戸田真志, 久保田真一郎, 鈴木克明: “精神障害領域作業療法における治療的態度修得のための熟考の機会を設けた授業設計と効果検証”, 教育システム情報学会誌, Vol. 42, No. 1, pp. 50-65 (2025)

(3) 吉村友希, 戸田真志, 久保田真一郎, 鈴木克明: “授業アンケートの自由記述に基づく改善は臨床推論学習に効果があるのか—精神障害領域作業療法における授業を対象として—” 教育システム情報学会誌, Vol. 42, No. 2, pp. 273-278(2025)

(4) 内藤哲雄: “PAC 分析実施法入門—「個」を科学する新技法への招待—改訂版”, ナカニシヤ出版, 京都 (2012)

(5) 吉村友希, 與座嘉康, 久崎孝浩: “作業療法学生を対象とした精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の作成”, 教育システム情報学会誌, Vol. 41, No. 2, pp. 162-176 (2024)